伝来の経緯

松永貞德は承応二（一六五三）年十一月十五日に三条花咲の宿で亡くなり、遺稿はその後のうちに鳥羽実相寺に運ばれ、翌十六日に同所で葬儀が執り行われた。葬儀には偽霊の門人ばかりではなく、和歌の門人らも多く参列したと思われる。遺稿には彫版、門人は皆でなく、和歌の門人らも多く参列したと思われ

長好詠切（吉田幸編「貞德集家」所収）近世文芸資料13・古典文庫には、埋葬の様子を詠んだ。

その夜、鳥羽実相寺の松陰にお詠みされ、日比は今一た

び隻の木丸な心に覚える事おびえて行ひや終に立ちせる花ならでなく、行ひるの道を詠んだにかへれば、このとき、

つるせぬ羽の玉をこの心に詠まれて、こふとリ

をし、口にむけめ、からひたるひつぎに、詠歌の

にしの庭にふたる松、かさきのさらなどをひるめとす

てへて……

継めけてふぞめひよく花の春、

の句を詠んでいる。このように、貞德の死後、日をおかめこころに、

その死の前後の模様を詠んだ「貞德終焉記」と、

詠の道」を讃られたと宣伝するかのようで、あるいは詠の道を実に作

られていることは、貞宗が「貞德終焉記」を書きたく、それを所持して

いたことの意味合いを考えている上で重要である。

雪の「茶杓竹」（寛文三年刊、序文には、

内正は、七八度ならでは見廻事なし。臨終のみぎりには十

日ばかりでも寄りつきだにせず。然に独往の追善の詞を詠み、これを所持して

されていることは、貞宗が「貞德終焉記」を書き、これを所持して

いたことの意味合いを考えている上で重要である。

雪の「茶杓竹」（寛文三年刊、序文には、

内正は、七八度ならでは見廻事なし。臨終のみぎりには十

日ばかりでも寄りつきだにせず。然に独往の追善の詞を詠み、これを所持して

いられることは、貞宗が「貞德終焉記」を書き、これを所持して

していたことの意味合いを考えている上で重要である。

雪の「茶杓竹」（寛文三年刊、序文には、

内正は、七八度ならでは見廻事なし。臨終のみぎりには十

日ばかりでも寄りつきだにせず。然に独往の追善の詞を詠み、これを所持して

していたことの意味合いを考えている上で重要である。

雪の「茶杓竹」（寛文三年刊、序文には、

内正は、七八度ならでは見廻事なし。臨終のみぎりには十

日ばかりでも寄りつきだにせず。然に独往の追善の詞を詠み、これを所持して

していたことの意味合いを考えている上で重要である。
明代の説話

宝暦二年（一七五二年）に、貞徳百図がある。この年京都では
「双林寺千句」（練和編）と「貞徳百図」の羅人波光編が刊行
された。無村は「双林寺千句」に出詞し、嘯山は「貞徳百図」に
なる諸家に貞徳顕彰の営みがあったこと、これに無村や嘯山もなん
らかの関わりを持っていた事に注目した。

いま一度、前引嘯山の説話の縫縫部分に注目してみる。
芳野山の題詠多々此の妙境に入ることあるはずの意。

「天性の端をかく」とは、説話を殊に移かけてある。説話の端
実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。

貞宗以前の説話にあっては、 Heroes in the 遠くの昭和の山

実に依る事ありと此の謂なり、皆正体を称す、而しこ
の篇は縫縫集の第一なるのみならず、又歴史の絶唱なり。
本文と表題

初期俳諧の研究の進展にもかかわらず「貞德終焉記」の本文は、これまで「続三十幅」に依れば他はなかった。近年では海岸島本編大正四年の水落露石による翻刻をとりあげて、これを校合した本文を提供している。『続三十幅』そのもののが、南勲自筆のものから転写されたと思われ、また露石の翻刻も遺漏の多いものであり、島本稿にはからむを残す思いが滲み出していた。

詳しくは乾氏複製を参照されたいが、貞親自筆本の存在が確認された事によって定まった「貞親終焉記」の本文は、字句を訂正する必要があるものの、その内容についてこれまでと大きく違う所はなかった。「貞親終焉記」という内訳については本稿でもこれまで一般的に使用されてきた「貞親终焉記」の名称を用いてきたが、先にも述べたように、貞親自筆と同時代の雪は「独吟の追善の詞書」とこれを呼んでいる。人の死に際して追善のため和歌や連歌を詠む事を古くより行わせており、「群書類従」に「扶桑拾集記」などには、この類の和歌が多く収められている。しかしながらその中に「終焉記」と題する文章は見出せない。それならば貞親は、どのような和歌の型を念頭に置いて、「この文章を成したか。あるいは、今日われわれは、この文章の内容を「貞親終焉記」として解釈し、貞親の死に臨む貞親は、追善の百額をなし、これにかななり長文の詞書を付し、そう考えするのが適当であると思われている。

「終焉の語義」

「終焉記」、という名称からすでに思い出されるのは、宗長の「宗祇終焉記」とその角の「苗父終焉記」である。このうち前者は作者によって明確に表題が付けられ、『續三十幅』に収められている。これに対して、宗祇終焉記は当初から宗長が「終焉記」という表題を意味していたか否かは断定しきれないものであるが、本文の末尾あたりに、宗祇の死を知った兼載が「せめて終焉の地を見伺らず」とある。「終焉の地」は、「宗祇の死んだ場所」という事である。なお「終焉の地」とあるが、本文の「終焉の地」の意味でも、兼載が最後の旅の果てにたどり着いた場所ということになるであろう。

ちなみに、大和辞典の「終焉」の項を参照すれば「①身の落ちきやすむすことも」という意味を第一に掲げ、②きんばること。
町にかぼし河あった梅の木の縁に坐り、誇り高き村人に、「花咲けごん、見ても不便かな。」

花咲けごん、見ても不便かな。 誇り高き村人に、「花咲けごん、見ても不便かな。」
花咲の宿周辺に関わる部分を引用しつつ、全体の構成の要點を示すのことはない。かつて、この花咲が餘生を送る、まさに「終焉の地」であった。

そのように考えてみれば、「貞貞終焉記」と、単に貞貞の死の模様を描く臨終の記ではない。多分に自己宣伝の臭みがあるものの、ここには貞貞の晩年を描いて、その遺徳を偲ぶという作者の意図が明瞭に示されている。このような「貞貞終焉記」の性格は、「終焉」の語の本来の意義に叶ったものであるともいえよう。

本稿は第十七回俳人文千勧賞に応じて刊載したものを基づくものである。会場で御教示を賜った方々、またその前後に種々の御助言をいただいた方々に御礼申し上げます。それに、夢雄文庫主より、乾憲雄氏により、「貞貞終焉記」の閲覧について格別御高配を賜りました。